

京都で21の試み

飲酒、喫煙、暴力行為、家出、万引き、薬物乱用など、生活環境の変化や子ども達の規範意識の低下、大人社会への興味が高じて非行に走る少年が増えています。

家庭や学校、地域社会が連携し、少年の生活や行動などの変化に注意し、少年非行を防止しようとするのは、京都府内全25警察署に「非行防止対策チーム」を編成、夜のパトロールなど活動を始めました。

一方、大学の研究グループが、地域と中学生のつながりを求めて、中学生のホンネやアイデアをぎゅくばらんに出し合うサロンを山科で開催し、中学生と大人が語る機会をつくろうとしています。

少年非行防止へ地域で連携



地域社会のスクラムで少年たちに愛の声かけ

京都市内の全警察署に非行防止対策チーム始動!

この趣旨からだとす。

京の繁華街、新京極や河原町をかかえる中京署では対策チームの一人ひとりが、それぞれの立場で少年たちを善導しようと「中京みちびき隊」と名付けました。毎月1日と第3金曜日の夜、中学校の先生や少年補導委員ら10余人が、にぎわう中心街のゲームセンターや公園、コンビニなどをパトロールして少年たちに「遅くならないように早くお帰し」とやさしく声をかけています。

その他、各署の「非行防止対策チーム」の想いのこもった命名を紹介しますと、管内の神社、寺院から上京署の「天神隊」、東山署の「青龍隊」、北署の「雷隊」、地域名で右京署の「嵐山隊」、大人と子どもをつなぐ川端、下鴨西署の「心つながり隊」、元氣いっぱい南署の「南サザンクロス隊」、下京署の「下京かがやき支援隊」、祈りを込めた伏見署の「伏見明星隊」、西京署の「西京再生隊」と

それぞれ特徴的なネーミングです。京都市内の少年非行の傾向をデータで見ますと、平成23年中に万引きなどの刑法犯で検挙・補導された少年は2772人で、前年より150人ほど減っています。学校職業別では高校生の非行が前年の29.4%から27.0%に減少し、逆に中学生が46.3%から48.4%に増加しています。こうした少年非行の背景には、少年自身の規範意識の

低下や孤立化、コミュニケーション能力の不足などが指摘されています。「地域の子どもたちは地域で守り育てる」という呼びかけで、少年補導委員会、自治連合会、PTA、京都府警スクールサポーターなど関係団体が寄り合って「非行防止対策チーム」を結成したものです。(対策チーム参加問い合わせは、各警察署 少年係 まで)



地域と大学のアイデアで若者を支えるしくみ 第2回ぎゅくばらんサロン開催!

「地域と若者」をテーマに活動する山科青少年活動センターでは、3月に引き続き、龍谷大学地域公共人材・政策開発リサーチセンター（LORC）との協働で「第2回ぎゅくばらんサロン」山科の中学生のこころ語り合いませんか?」を8月5日（日）に実施しました。

3月に行った第1回では、地域と中学生のつながりが必要でも豊かでなく、地域の一員として中学生が参加できる仕組みがないことがわかりました。今回はそのことも踏まえて、両者の間につながりが生まれるようなアイデアをできるだけたくさん出し合いました。

特に焦点を当てたのは、関わり方の難しい、非行傾向のある中学生です。龍谷大学法科大学院の石塚伸一教授（犯罪学）による冒頭のミニレクチャーでは、非行少年の大多数が「不処分」として地域に戻されるため、統制を強化するのではなく地域で少年たちを支える仕組みが重要だとい

お話をされました。

その後のグループ討議では、たとえば「公園で花火が禁止されている」という話題から、「中学生には、健全で堅苦しいものには見向きもされない。大人も一緒に楽しめるような遊び心のある取り組みが必要だ」という意見が出たり、「中学生の意見や感覚がまじりくりに反映されることがほとんどない」「子育て世帯が孤立している」「学校と地域が連携するためのアイデアが必要だ」などの課題が提起されたりと、さまざまな立場から「ぎゅくばらん」に語られました。しかし、大人たちが語り合えば語り合うほど、中学生がいま実際に何を考え、何に悩み、何を大事にしているのかも、と知りたいという機運が高まってきました。今後、第3回・第4回と続いていく中で、中学生と大人たちが同じテーブルにつき、「ぎゅくばらん」に語り合うことを目指していきます。

(山科青少年活動センター ユースワーカー 上原 裕介)

